毎日歌壇

米川千嘉子 選

怒りにくい相手を怒る責任を果たした今夜は一杯やろう　広島市　堀　眞希

◇評◇「怒りにくい相手」であればなおさら怒らないのが無難だが、それはできなかった。人として闘う必要があったのだ。

隠れていて私から出ることはない楽天的で明るい私　仙台市　小野寺寿子

◇評◇他人には見えない自分の性格があって、自分を助けているのを知っている。

若人ら長き長き列に並びをり何か求めるやうにプリンを　幸手市　中村　早苗

留守電に津波だ逃げろと弟の声聞きたくて消せないわたし　西東京市　佐々木節子

柔道に一体何を学んだか力に頼むロシアのプーチン　国立市　佐藤　建

我が村は六戸九人の過疎の里選挙あるとて候補来たらず　杵築市　緒方袈裟昭

選挙後にはじめてみながら考える何を総理に託しちゃったか　京都市　寺西　和史

まだ耳もある絵は描けぬ知らぬ間にゴッホの年を越してしまった　名古屋市　外山　雪

嬉しくてここ二、三日眠れずに晴れて迎へる退院の猫　鎌ケ谷市　海野　公生

インテリアに貰われてゆく顕微鏡黒きボディーに昔日思う　瑞穂市　渡部　芳郎

加藤　治郎 選

罪という言葉をきくと思いだす色は白　いま飛んでいく鳥　所沢市　神田　望

◇評◇罪に色彩がある。白は無垢・無意識を想起させる。悪意のない罪ということだろうか。鳥は解き放たれる意識の比喩だ。

マフラーを掌にまるめたら心臓の大きさをしてかすかにうごく　大野城市　野分　のわ

◇評◇マフラーが心臓の大きさになり動き始める。現実を異化する過程が迫真的だ。

冬の音　顔を失くした恋人に朝が来たよと口づけをする　宮古島市　塩見　佯

セロトニン枯渇している　泥沼のように曇った空を見上げる　東京　安　高良

繁殖の出来ない僕と彼がこの世界の隅で重ねる刹那　北九州市　もりともみち

ばあちゃんが凄まじく怒る歩行器を持ち上げ床に打ち付けながら　広島市　堀　眞希

蠟梅のすけるきいろと空のあお今夜のねむり薬となりぬ　津　市　川原田明子

帰りたい帰りたいけど帰れない津波と共に消えた故郷　西東京市　佐々木節子

海までの道を尋ねる前に海が見えてしまう町だあなたは　大津市　世田　夏雪

駅前のイオン跡地に建つものを知らない地元住民である　大津市　佐々木敦史

水原　紫苑 選

戦争が生きものならばその母はわが子に乳を与ふるだらう　相模原市　高田　祥聖

◇評◇戦争が戦争を生み、いつくしんで育てること。おそろしいが、これは現実に近いのかもしれない。

さめざめと泣くわたくしを一瞥し記憶のひかりへ消ゆ修道女　東京　境　千尋

◇評◇信仰は記憶から生まれるという。記憶のひかりは誰にも見えるのか。

白梅は春のうららにひらめいて獣のゆめへ身体をほどく　大阪　中村　杏

隕石にボクだけの街を作り上げ最高速度で海に突き刺す　堺市　江口　智幸

法廷で目撃者満月の証言（この人は何も悪くない）　甲府市　村田　一広

この駅は磁場のある駅　さざめきの牡丹雪なる夜を組み上ぐる　東京　吉岡　耕大

雪の死をつめたい舌で味わって身体はほのぐらい火葬場　東京　石川　真琴

どんなときでも靴は揃えて置きなさい　旅立つ老いた鳥のしずけさ　宮古島市　塩見　佯

一行の歌よ直立せよと言いながら樹木の息を見つめる　横浜市　安西　大樹

遠雷が荒川の向こう鳴っていてクラスメイトは結婚したんだ　東京　結羽　成

伊藤　一彦 選

演説の「働いて働いて」より「はたらけど／楽にならざり」が人間味ある　江別市　海老澤　基

◇評◇例の演説の100年以上前に啄木が歌った、働いても「楽にならざり」の方が現代に通じ人間味を感じると。庶民の声だ。

夢の字の「夕」がぱあんと跳ねている子の書き初めにゆめがはみだす　東京　稲山　博司

◇評◇オノマトペの「ぱあんと」がいかにも元気で面白い。うれしさあふれる親の歌。

紅ズワイ甲羅も脚も解きほぐす漁場の子等の冬の給食　七尾市　田中　伸一

啄木鳥のま赤き頭くろもじの枝の白雪かすめ飛びゆく　山形市　佐藤　紀之

大雪の札幌歩む　駅までの道は余白だらけの詩集　札幌市　住吉和歌子

ビーフンを蒸し煮している数分にテラスを包む雪の激しさ　南魚沼市　木村　圭

雪はもうすがたも見えず踏みくだく凍結防止剤の白さを　東京　奥山いずみ

「失恋は人を綺麗にするから」と聞いて何度もみている鏡　相模原市　榎本　ハナ

社食にて最後の昼食わかめ蕎麦汁まで飲み干し明日で定年　川崎市　栗林　尚美

推し活のような選挙を憂ひたり愛国心とは考えること　春日市　伊藤　亮

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます